

学校と地域がつくる 希望への学びあい

教育委員会とNPOの連携で進めるESD(持続発展教育)



平成21年度多摩市ESD研修会の成果より

多摩市教育委員会

NPO法人 持続可能な開発のための教育の10年推進会議(ESD-J)

多摩市はなぜ全校でESDを取り組むのか？

持続発展教育 (ESD) の推進に向けて

学校の先生や保護者の方は、子どもたちの「何のために学ぶのか？」「どうして地域の学校で学ぶのか？」という問いに答えを用意しているでしょうか？

多摩市教育委員会では、この問い合わせに対して「多摩市教育振興プラン——人と学びを未来につなぐ基本計画——」を策定しました。その中の重要な教育施策の一つが、全校における持続発展教育 (ESD) の導入と、ユネスコスクールへの登録です。

多摩市が ESD に取り組む理由をあげます。現代社会は、地球規模の環境破壊や貧困や紛争などの問題や、一方で多摩という地域に目を向けても急速に高齢化を迎えるとしているニュータウンの問題など、持続不可能な問題が山積です。将来日本、そして多摩市で暮らす子どもたちには、その延長線上の社会において、自らの考えを持って、新しい社会秩序を作り上げることが求められるのです。だからこそ、地球的な視野で、身近な暮らしを変え、地域づくりに参加する市民を育成するための教育が必要です。その教育こそが ESD です。

一方、今子どもたち置かれている状況に目を向けても、聞く力、考える力、問題解決する力、表現する力、学ぶ意欲などの低下が指摘されています。また不登校、いじめ、学級崩壊など学校・家庭が抱える問題や、フリーター、ニート、衝動的犯罪など地域・社会の抱える問題（特に青少年）など多くの課題があります。それらの原因のひとつとして、子どもたちが自然・家族・地域・社会から隔離され、実体験や多様な立場の人とのコミュニケーションが不足していることなどが考えられます。体験や関係性を補完する ESD は、まさにそのような子どもたちの諸問題の解決策としても有効です。事実、ESD を実践している先進校からは、ESD の実践により子どもたちの学習意欲の向上や、友達同士、地域住民との関係性が向上したという報告もあがっています。

このように、すべての学校が地域と一緒に ESD に取り組むことで、子どもたちの未来を創造する能力を育むことができます。そしてさらには地域住民や保護者の意識にも変化が生まれ、地域社会をも変えていける可能性があるのではないでしょうか。

全校への ESD 導入に先駆けて、多摩市では平成21年度、文部科学省の日本／ユネスコパートナーシップ事業として、「多摩市 ESD（持続発展教育）研修事業」を NPO との連携により実施しました。本冊子は、本年度の研修事業の成果を踏まえ、教育委員会と NPO が連携して進める ESD の推進について紹介するものです。多摩市の ESD への挑戦は始まったばかりですが、ESD に取り組む多くの学校関係者との情報交換のきっかけになればと期待しています。

東京都多摩市教育委員会

ESD とは？

ESD とは、持続発展教育 (Education for Sustainable Development) の略称です。2002年のヨハネスブルグサミット（持続可能な開発に関する世界首脳会議）で、日本は、持続可能な社会を実現するために世界中で人づくりに取り組むことを提案しました。これを受け開始されたのが、「国連 ESD の10年」（2005年～2014年）です。

ESD は、学校教育、学校外教育を問わず、国際機関、各國政府、NGO、企業等あらゆる主体間で連携を図りながら、教育・啓発活動を推進する必要があるといわれています。また、その領域は、環境、福祉、平和、開発、人権、国際理解、貧困、経済、文化の継承、など多岐にわたるものです。

わが国の ESD 実施計画では、ESD が目指すべきは、「地球的視野で考え、様々な課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手となる」よう個々人を育成し、意識と行動を変革することとされています。

「新学習指導要領」でも、総合的な学習の時間ではじめ、社会、理科、技術家庭科などにおいて、「持続発展教育」の視点が導入されています。

ESD的とはどういったことでしょうか？

ESD的視点のチェックリスト

ESDは概念的で難しい、とよく言われます。しかしESDは特別なものではなく、ESD的な授業や活動は、すでに学校でたくさん実践されています。多摩市ESD研修事業（研修の内容は4ページ参照）では、参加した先生たちが「ESD的って何？」をとらえ直すことから始めました。以下は先生たちの議論から、「ESD的」な要素をいくつかピックアップしたものです。皆さまが「ESDとは？」を考える際の、ひとつの材料としてご紹介します。

こんな目的意識をもっています

- さまざまな人の立場や意見を尊重し、協力しながら物事を解決していける人を育てる
- 地域や社会に積極的に関わるような、地域社会の担い手を育てる
- さまざまな問題が山積する社会を持続可能に変えるような未来の担い手を育てる

こんなテーマの授業や活動をしています

- 人と人のつながり：命や人間の尊厳の大切さ、多様性の尊重
- 人と自然のつながり：地域の自然と暮らし・産業・文化、資源の有限性や循環
- 人と社会のつながり：貧困や人権・平和の問題、私たちの暮らしと世界とのつながり

こんな方法を大切にしています

- 五感を使う、本物を体験する
- 子どもの主体性を尊重し、それぞれの発見、気づきを重視する
- 調査やインタビュー、ディスカッションを取り入れる
- 子どもたちが関心を持ち、体験し、探求し、ふりかえる、といったストーリー性をもたせる
- 総合的な学習の時間や特別活動と教科学習を連動させる
- 地域の問題や身近な課題を掘り下げる、その解決策やよりよい未来の姿を描く
- 多様な立場、世代の人たちと一緒に学びあう

このような人や環境を活かしています

- 地域の自然や文化施設、社会教育施設などのフィールド
- 大学やNPO、企業、農家、商店主、保護者などの地域の大人たちや専門家
- 地域のNPOや自治会などが行う活動や行事
- 他校種（幼、小、中、高、大）との連携
- 地域の人や多様な組織とのつなぎ役となるコーディネーター

研修をESDの実践につながるしくみに

NPOとの連携により実施したESD研修事業

平成21年11月～平成22年2月にかけて、5回の連続講座としてESD研修事業は実施されました。ESD研修事業の目的は以下の3点です。

- ①参加した教員が「ESD」の視点と意義を学ぶ
- ②すでに実践している授業をESD的に発展させるための「視点」と「手法」を学ぶ
- ③学校のESDを支える地域とのつながりを強化する

実施回数も多く、参加した先生方の負担も大きかったと思いますが、単発の講義型の研修では得られない成果が得られ、またESDの実践に向けた具体的な課題も抽出された研修会となりました。

多摩市ESD研修会の流れ

各回とも2時間30分程度のワークショップ形式の研修会を、小学校教員7名、中学校教員6名の小グループで実施しました。

- 第1回 ESDの基礎を学び、ESD的な学校の活動を出しあう
- 第2回 ESDの視点で、授業・活動の発展に向けたアイデアを出しあう
- 第3回 小中学校それぞれでモデルプランをつくる
- 第4回 ESDの視点を再整理し、モデルプランをブラッシュアップする
- 第5回 研修の成果を公表する（研究主任研修会併設）



本研修事業の特徴

ネットワーク型NPOと企画

ワークショップ形式の連続講座

ESDを進めるコアとなる教員の育成

地域のNPOも研修へ参加

今ある活動を活かしたプログラム開発

NPOの専門性とネットワークを活かす

教育委員会とNPOの連携で生まれる可能性

21年度に多摩市で実施した研修事業の企画および実施は、ESDの全国的なネットワークを有するNPOである「持続可能な開発のための教育10年推進会議(ESD-J)」との連携で進められました。また、研修の中には、環境や食育などをテーマに活動する地域のNPOにも参画いただきました。ESDを進めていく際に、教育委員会がNPOと連携する意義は何でしょうか？

NPOの持つ専門性と経験を活かす

ESDの範囲は環境、福祉、平和、開発、人権、国際理解、地域づくり、文化の継承などとても広範囲です。このような幅広い社会的課題の現状を把握しながら、子どもたちと一緒に実践的な課題解決学習に取り組むことは、現場の先生だけでは簡単ではありません。また正解の無いこれらの問題への取り組み方を学ぶことがESDの目的のひとつであるとすれば、すでに実践的に取り組んでいるNPOや専門家の力を借りながら進めることが重要さは明らかです。

そのようなNPOの持つ専門的な情報や経験と学校現場の持つ教育的スキルとのコラボレーションによって授業や活動を進めていくことが理想的です。

NPOのネットワークを活かす

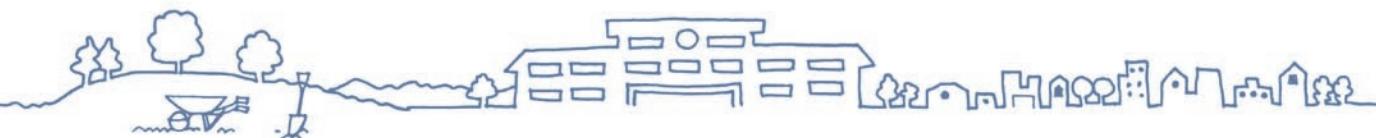
しかし、学校の現場とNPOの連携はそれほど簡単ではありません。各校が独自にNPOと連絡をとり、調整を進めることが負担はとても大きいでしょう。またさまざまあるNPOの中で、学校のニーズにフィットし、正しい理念と専門性をもったNPOを吟味することも必要になってくるでしょう。

そのような際に、多様なNPOとのネットワークを持つ中間支援組織(NPOセンターなど)やネットワーク型のNPOと教育委員会が組織的に連携をして、各校を支援していくことで、効率的で有効な支援体制をつくることが可能となります。

今回のESD研修会へ協力いただいた地域のNPOは、研修中に先生たちから出たアイデアに合わせて依頼したのですが、その際NPOの検討や交渉、調整などといったコーディネートをネットワーク型のNPOが受け持ったことで、多摩市教育委員会の事務的な負担は軽減され、研修後にESDを進める協力者を得ることができました。

地域独自のコーディネーター

さらに、今後の課題として、研修に参加した先生たちからも、学校でESDを面的に広げていくためには、このようなネットワークと中間支援機能を持つ組織と協力しつつ、さらに地域に特化した学校コーディネーターを育成、配置していくことへの期待と要望の声が多くあり、多摩市としても前向きに取り組んでいく予定です。



ESD研修の3つの成果

1. 地域で ESDを先進的にすすめる教員の育成

参加した13名の先生たちは、はじめこそ戸惑っていましたが ESDの概念の理解が進む中で、「ESD的に…」と先生たちが自然と語り始めました。次年度以降は今回参加した先生たちが、先駆的に実践と研究を進めることで、ESDの成果や課題を発信し、市全体の ESDを導く役割を担うことが期待されます。

2. ESD実施の協力体制づくり

ESDを進める NPOや地域の市民団体などと協働で研修会を進めることで、研修会の成果を高めたのはもちろん、次年度以降、各校で実践を進めるときのサポート体制も構築されつつあります。

3. 既存の活動を活かした ESDプログラムの開発

今回の ESD研修会で一番大切にしたことは、外から持ち込むのではなく、今あるもの、今やっていることを大切にし、教員と地域の NPOの経験と知恵を結合し、ESD的な発展を導き出すことでした。研修を通じて ESD的に発展させた2つの授業計画をページ下部でご紹介します。

ESD研修で浮かび上がったESD実践の課題

一方で課題もいろいろと見えてきました。学校での実践を ESD的に発展していくアイデアはたくさん出るもの、授業数の確保、協力者を得るための負担や金銭的な制約などを考えると実現は難しいという悩みもそのひとつでした。また、学校の教員や保護者の ESDへの理解も重要なことも見えてきました。

授業数の確保については、総合の時間と教科を今まで以上に積極的に横断的につなげることが必要ですが、それが ESDの学びを豊かにすることにもつながることを確認しました。また、地域の協力者を得るための支援として、コーディネーターの配置に取り組み始めたのも前述の通りです。

ESDへの理解の普及という面では、22年度以降、全校で面的に ESD研修を進めていくと共に、保護者や地域ぐるみで ESDを実践していくことが、一番の理解促進につながるだろうと考えています。

小学校

食育+農業体験+ ESD

多くの学校が取り組んでいる食育や農業体験を、ESD的な視点で組み立て直しました。給食の残菜調べからはじまり、残菜による土づくり、野菜づくりなどを地域の NPOや農家の方と取り組みます。さらに社会科の「地域の歴史」などと関連付けながら、郷土料理「多摩そば」づくりを通して、地域の歴史と食の関係を掘り下げます。そして学習は世界の食料事情へと発展し、途上国と自分たちの暮らしの違いとつながりを学び、自分たちにできることに取り組みます。子どもたちは身近な「食」をキーワードに、世界にある不平等や、環境のこと、社会のこと、経済のこと、地域のこと、そして私たちが多くの命のつながりの中で生きていることを、1年以上かけて総合的に学んでいきます。



地域で学び、地球規模で考える

多摩市ESD研修会をふりかえって

国立教育政策研究所 総括研究官 五島 政一

持続発展教育(ESD)は、まさに学習指導要領で提示された、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの「生きる力」を育むための教育です。また、地球規模の持続不可能性に立ち向かい、地球的な視野で、身近な環境や社会の課題に気付き、取り組む市民を育成するための教育でもあります。

そのため、ESDを進めていくためには、身近なくらしや地域で起こっていることを学び、関わり、取り組んでいくこと、そしてその体験を地球規模のできごとつなげて考えることが重要です。つまり、ESDとは、教員が地球的視野に立って、これまでの地域学習を再構築することと言つてもいいでしょう。

21年度に多摩市で実践された「ESD研修事業」は、地域のNPOの協力を得て実施されました。教員がこのような研修を通じて、多くの地域のNPOや地域住民と出会い、地域の学習を豊かにしていくことは、子どもたちにとっても、そして地域にとっても意義深いものと言えます。

今回は、研修という形で一部の教員と一部のNPOとの協働プロジェクトでしたが、全校でESDを進めていくという多摩市の方針を実現するためには、今後さらに地域と学校の連携を深く築くことが必要になってくるでしょう。そして今後はより地域に特化したESDの教材とカリキュラムを教員自らが開発することで、その地域にあるテーマについて、専門的な知識を持つようになり、それが教師の自信にもつながっていくのです。

多摩市に限らず、全国各地において、地域の学びが盛んになり、地球規模で思考する学べるESDの事例がたくさん開発されることを期待しています。

中学校

職場体験+ESD

多摩市ではすべての中学校で行われている職場体験。この5日間の体験に、その仕事につながる社会の課題への取り組みを学ぶ視点を加えました。例えば「環境」をテーマにした場合、事前学習で環境NPOや企業の協力を得て、環境問題や企業の環境への取り組みについて学びます。そして各職場で仕事を体験するとともに、各職場の環境への取り組みにも参加、またインタビューを通して、大人たちの考え方や苦労を知る。体験後には、各職場の取り組みを共有した上で、社会のために何が必要かを考え、自分たちができること、各職場でできることを話し合い、地域や職場への提案につなげます。



ESDに取り組む学校のネットワークへ

今後、全国の学校で「持続発展教育（ESD）」を普及促進していく上で、文部科学省日本ユネスコ国内委員会により加盟が呼びかけられている「ユネスコスクール」のネットワークを活用することがひとつの有効な手段であると考えられます。多摩市では市内各校の積極的なユネスコスクールの登録を応援します。

ユネスコスクールとは？

ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校です。世界180の国・地域で8500校以上のユネスコスクールがあります。（2010年3月現在）

ユネスコスクールの活動目的

- ユネスコスクール・ネットワークの活用による世界中の学校と生徒間・教師間の交流を通じ、情報や体験を分かち合うこと
- 地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発、発展を目指すこと

ユネスコスクール加盟のメリット

世界のユネスコスクールの活動情報の提供、世界のユネスコスクールと交流する機会の増加、米国・韓国・中国等海外との教員交流、世界の教育事情、国連機関の活動の把握、ESDのための教材・情報の提供、ユネスコスクールHPを通じた情報交換、ワークショップ・研修会への参加、国内の関係機関との連携強化 等

参加資格

- 就学前教育・小学校・中学校・高等学校・技術学校・職業学校、教員養成学校は、国公私立を問わずユネスコスクールに加盟することができます
- ユネスコの理念に沿った取組を継続的に実施していることが必要です

問い合わせ先

ユネスコスクール事務局（日本ユネスコ国内委員会事務局・文部科学省国際統括官付）

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2

TEL: 03-5253-4111（内線3402） FAX: 03-6734-3679

Email: jpnatcom@mext.go.jp ウェブサイト：<http://www.mext.go.jp/unesco/>

ユネスコスクール・ESD関連リンク集

日本ユネスコ国内委員会－文部科学省	http://www.mext.go.jp/unesco/
ユネスコスクール公式サイト	http://www.unesco-school.jp/
財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)	http://www.accu.or.jp/jp/
社団法人日本ユネスコ協会連盟	http://www.unesco.jp/
NPO法人日本持続発展教育（ESD）推進フォーラム	http://www.ellesnet.co.jp/home/esd/
NPO法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議（ESD-J）	http://www.esd-j.org/

平成21年度 文部科学省委託
日本／ユネスコパートナーシップ事業

●本冊子に関するお問い合わせ先

多摩市教育委員会

東京都多摩市関戸6丁目12番地1 | TEL: 042-375-8111 (代表)

NPO法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議（ESD-J）

東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山B2F

E-mail: admin@esd-j.org | TEL: 03-3797-7227

